

心にゆとりを

中 二

母と買い物に行ったある日のこと。店内は沢山の人でにぎわい、レジには行列ができていた。どれ程の人が並んでいるのかさえわからない。これからその列に並び、待たなければいけないのかと思うと、私は少しいらいらした。母に車で待っていると言おうか、それとも我慢して一緒に待つか、店内を回っている間、ずっとそんなことを考えていた。だが、結局私は母に何も言えないまま、母とレジに並んでしまった。やはり、先が見えない。長い時間を感じる。今からでも母に車で待っているとのおうか。並んでいる間も、そんなことばかり考えていた。その間、少しずつだがレジに近づいていた。ふと母を見ると、母は隣のレジを見つめていた。母の視線をたどると、そこには腰の曲がった小柄なおばあさんがいた。レジの列に並んでいるのか。だが、少し列から外れているように見え

る。どうしたんだらう。私はそのおばあさんから目が離せなくなっていた。そして、そのおばあさんが列に入れないでいることがわかった。皆、そこにおばあさんがいることがわかっていくはずだ。だが、誰もおばあさんを入れようとはしていない。中には、険しい顔をして、おばあさんにきつい言葉を投げかける人さえいた。誰か入れてあげて。私は心の中で叫んでいた。

その時だった。母の体が動いた。同時に、おばあさんが入れずにいたレジの列の女の人が声を出した。

「おばあちゃん、ここに入りな。」

女の人に向けられた周囲の視線は厳しかった。だが、女の方は気にもせず、自分の前におばあさんを入れた。私は自分の胸が熱くなっていることがわかった。私は、その女の人の優しさが嬉しかったのだ。そして、その後の母の行為が嬉しかった。

母は、カートに乗っていたおばあさんの買い物かごを、レジ台に乗せた。そして、その後もおばあさんを気遣い、おばあさんの手伝いをし

ていた。そんな母に、おばあさんを列に入れた女の方は、「ありがとうございました。」と声を掛けてくれた。母は、

「こちらこそ、入れてもらえて良かったと思いますました。」

と、安心した表情で言葉を返した。そして、帰りの車の中で母は、女の人のことを心にゆとりがある人だと話していた。

その言葉に私は、はっとした。なぜなら私は、自分がおばあさんをレジに入れなかった人達と同じかもしれないと、思ったからだ。私は、先が見えないレジにいらいらしながら並び、待っていたのだ。そんな私に対し、あの女の方は親切心に満ち、き然としていた。そして、母がおばあさんの為にした行為に対し、感謝の言葉を口にした。それも、ごく自然だった。

その日以来、私は少しだけ心にゆとりをもつて行動が出来るようになった気がする。今は、レジを待つ長い列を見ても、いらいらすることはない。それは、母とあの女の方が、私の心を動かしてくれたからだと思う。

心にゆとりがある人と母がそう言ったあのときの女の人に、私も一歩近づけたような気がする。

